



前南進路だより

R7・第8号 10月31日発行

1、2学期当初の主な進路行事

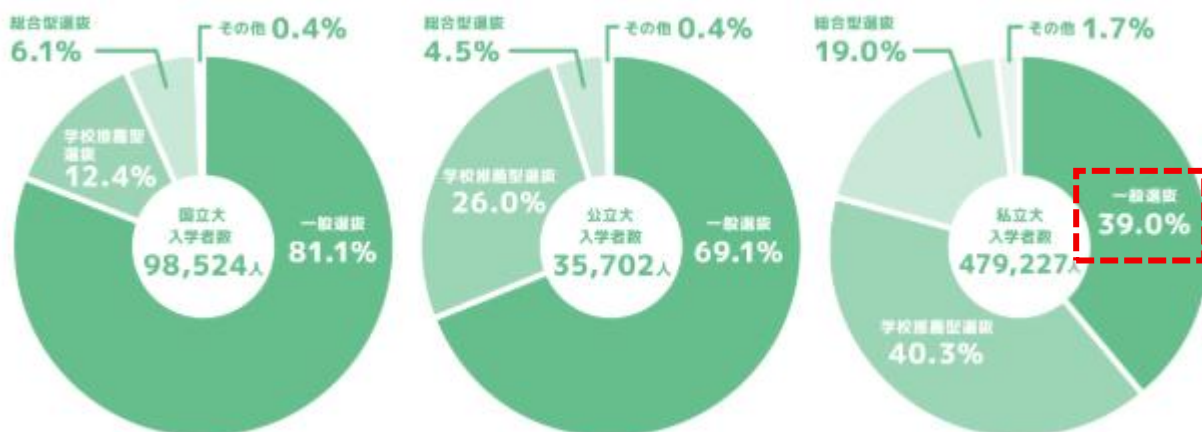
(4) 学校推薦型選抜・総合型選抜の出願（3年）

2学期に入り、総合型選抜・学校推薦型選抜（指定校制・公募制）の出願時期となりました。近年、各大学における総合型選抜・学校推薦型選抜（指定校制・公募制）＝年内入試の定員は、増加傾向にあります（下図参照）。すでに私立大においては、一般選抜を経て入学する学生数は半数を割り、4割ほどまでになっています。「総合的な探究の時間」・「資格試験」・「ボランティア活動」など高校時代に多様な活動を経験した人にとって、自らの多様な経験を生かしてチャレンジできるため、総合型選抜は魅力的な入試方式といえます。同様に、学校推薦型選抜（指定校制・公募制）も一般選抜と比べて早期に合格を確保できるという魅力で、年々志願者数が増加しています。

しかし、年内入試を受験する場合には、【志望理由書の作成】・【小論文や面接指導】が必要となるため、一般入試に向けた学習時間の確保が難しくなることも懸念されます。しかし、「第一志望の大学に合格するチャンス」と捉えれば、そのチャンスをいかすことも必要かと思われます。そこで、総合型選抜と学校推薦型選抜（指定校制・公募制）の違い・出願要件について確認をし、自分にあった入試方式を検討してみてください。

※旺文社パスナビ参照

選抜方式別の大学入学者の割合（2024年入試／文部科学省資料より作成）



2026年度入試対策用『進学時代7月臨時増刊』内記事「学校推薦型・総合型選抜 主ホント対策」より作成

【総合型選抜と学校推薦型選抜（指定校制・公募制）の違い】 ※代ゼミ資料参照

	総合型選抜	学校推薦型選抜	
		指定校制	公募制
学校長の推薦	不要	必要	
出願	9月1日～	11月1日～	
合格発表	11月1日～	12月1日～	
主な評価ポイント	学びへの意欲や問題意識 （入学後の可能性）	高校での成績や活動 （過去の実績）	
選考方法	書類や小論文、面接に加え、プレゼンテーションや体験授業など多様	書類+小論文+面接（通常）	
選考パターンの例	①書類審査（調査書、推薦書、志望理由書など） ②書類審査+面接 ③書類審査+体験授業+面接 ④書類審査+プレゼンテーション ⑤書類審査+学力試験+面接 ⑥書類審査+エントリーシート+面談+面接	①書類審査 ②書類審査+面接 ③書類審査+小論文+面接 ④書類審査+小論文+学力試験+面接 ⑤書類審査+学力試験+面接 ⑥書類審査+実技試験（実験）+面接	

【総合型選抜と学校推薦型選抜の出願要件】 ※代ゼミ資料参照

	総合型選抜	学校推薦型選抜	
		国公立	私立
専願 or 併願	国公立はほとんど、私立は7割以上が専願	専願	西日本：併願可 東日本：専願が多い
現役 or 浪人	現浪の区別が厳しくない。浪人生でも出願可が多数	多くが現役生のみ	現役生のみ：約3割 浪人生：出願可が多数
成績基準	設定しない場合が多い。学校推薦型よりも緩やかな基準	3.8～4.3以上が主流	「なし」・「3.0」・「3.5」のどれかが多い
英語資格	スコアの提出を義務付けている大学も徐々に増加		
その他	特定の科目の履修（特に理系）や、資格・検定・活動実績など		

【総合型選抜のスケジュール例】 ※旺文社パスナビ参照

大 学	入試方式	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
国公立大	総合型選抜 共通テスト課す				出願	出願-1次選考（書類審査）	2次選考	共通テスト	合格発表・入学手続
	総合型選抜 共通テスト免除			出願-1次選考（書類審査）	2次選考	合格発表・入学手続			
私立大	総合型選抜	エントリー・面談			出願-1次選考（書類審査）	2次選考	合格発表・入学手続	大学によっては3月にかけて複数回実施するところもある	

【学校推薦型選抜のスケジュール例】 ※旺文社パスナビ参照

大 学	入試方式	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国公立大	学校推薦型選抜 共通テスト課す	共通テスト 出願受付	出願	選考	共通テスト	合格発表 入学手続	
	学校推薦型選抜 共通テスト免除		出願 選考	合格発表・入学手続			
私立大	学校推薦型選抜 (公募制)		出願 選考	合格発表・入学手続		大学によっては3月にかけて複数回実施するところもある	

総合型選抜は、かつてのAO入試（アドミSSIONズ・オフィス入試）と同じく、大学・学部が求める学生像（アドミSSION・ポリシー）と受験生の能力・適性・意欲・目的意識が合致しているかどうかを選考する入試方式です。特に、アドミSSION・ポリシーは大学ホームページ等で必ず確認しておくことが重要です。また、出願期間の開始が早く、1次選考と2次選考に分かれて行われることが多く、学校推薦型選抜と比べても選考期間が長くなる傾向が多いようです。そのため、夏休みから【志望理由書の作成】や【面接の準備】を進めていかないと、下記の失敗例と同様なことが起きてしまいます。そして、私立大では基本的には専願が多かったものの、併願可能な総合型選抜が増加していることが、最近の傾向でもあります。

～総合型選抜におけるよくある失敗例～ ※旺文社パスナビ参照

(1) アドミSSION・ポリシーの理解不足

国公立大の工学部を志望していたA君は、「大学ではアルバイトや得意な英語の資格試験の対策に力を入れて早く社会で活躍したい」と考えていたが、大学が求める人材「将来研究者として活躍したい人材」であり、アドミSSION・ポリシーにも明示されていた。

総合型選抜の面接では「大学ではどのような研究がしたいか」や「将来研究者になりたいか」などの質問が問われたが、うまく答えることができず、面接官に対して、大学の求める人物像に合っていないという印象を与えてしまった。高校の評定平均はよい成績だったが、不合格となった。

(2) 安易な気持ちで総合型選抜を受験

B君は、学力試験に不安があるため、総合型選抜で第一志望の大学に挑戦をすることを考えた。最初は、書類審査と面接であればそこまで時間がかからないだろうと軽い気持ちで受験したが、予想以上に準備が大変で時間を取られ、学習時間が減ってしまった。面接でアピールできる高校時代の実績も持ち合わせていなかったため、総合型選抜は不合格。一般選抜でも志望校の変更を余儀なくされ、こんなことなら最初から勉強して学力を上げて一般選抜を狙えばよかったと後悔した。

(3) 面接での準備不足

Cさんは、総合型選抜の面接に臨む際、志望理由書に関してはしっかりと準備していたが、面接に対する準備が不足していた。初対面の面接官2名に質問されて、緊張のあまり言いたいことを十分に伝えることができなかった。面接で質問された内容は、志望理由書の内容を深掘りするような内容で事前に想定しておけば対応できる内容だったと、準備不足を反省した。